

# まんだら通信

第164号 (通巻196号)

平成22年(2010)02月 佛誕2576年

295-0103 千葉県南房総市白浜町滝口1084  
真言宗智山派 天神山 紫雲寺 高橋 龍渉  
郵便振替 00120-2-43163 紫雲寺  
TEL0470-38-4740/FAX 0470-30-5040  
<http://www.shiunji.org/>  
Mail post@shiunji.org

## 少欲と知足

「アーナンダよ。二本並んだサーラの木(沙羅双樹)の間に、頭を北に向けて床を用意しなさい。私は疲れた。横になりたい。」

それは、二千五百年前、北インドの二月、満月の夜でした。

この『最後の旅』の出発地ラージャガハ(王舎城)から、一緒につき従って来た修行僧達や、急を聞いて駆けつけたクシナガラ(王舎城)の村びとたちの前で「私の亡き後は、この40年間説き示してきた私の教えと、私が定めた諸々の戒律がそなた達の師となるのであるから、生身の私の言葉と、思つて怠りなく励むが良い」と仰りながら、最後の教えをお説きになりました。

それが『遺教経』で、2月15日の涅槃会の前の晩、つまりお逮夜には多くのお寺で読誦します。

智山派総本山の智積院では、鎌倉時代の華嚴宗の高僧で、ダークダックスが



歌った京都の梅尾、高山寺の明恵上人が曲をお付けになった、約2時間かかるこのお経を、前日の2月14日夕方、大恩あるお釈迦さまを偲びながら、数十名の修行僧達が広い金堂で朗々とお唱えします。当山でも、須弥壇の前に写真の涅槃図を掛けてお唱えしています。

それはあたかも、遠く旅立つ親が愛し子に教え諭すように、一々具体的な例を挙げて説き進めるそのお言葉は、二千五百年の時を超えて今ここに私たちに説いて聞かせているように思えます。こんな一節があります。

「食事は、飢えや渴きを除くためのものだから、菓を飲むような気持ちで戴くべきであつて、好き嫌いを言うべきではありません。」

好きなものをたらふく食べ過ぎて、成人病予備軍になる、今の私たちのことのように聞こえてしまいますね。

また「多欲の人は、利益を求めることが多いゆえに苦悩もまた多い。少欲(無欲ではないことにご注目)の人は求めることが少ないので、多欲の人のように、願いがかなわずに思い煩うことがないのです。少欲を実行することを得られる良い結果は沢山あつて、例えば心にもないお世辞や諂いで人の気を引く煩わしさがありません。そしてまた、見たり聞いたりした、欲望を膨らますものに心を動かされる

ことがないのです。だから、少欲を心がけることで心は穏やかになり、世の中について憂いや恐れがなくなるのです。」

続けて「更にまた知足、つまり

満足するという心がけを身に付けるべきです。この心で暮らせばいつも穏やかに過ごせるでしょう。例えば地面に寝るような暮らしをしても、生活はいつも安楽そのものです。この心を知らない人は、天上の宮殿のような、はた目には何不自由ないように見える暮らしをしていても、いつも、もつともつとという欲望に振り回され、安らぐことが出来ないのです。」

ルンビニの花園の木の下でお生まれになり、ブツダガヤの菩提樹の下で悟りを開き、そして今、クシナガラ(王舎城)の木の間に永の別れを告げようとして

いるお釈迦さま。悟りを開かれてからの40年間は、村のお堂や軒先を一夜の宿とし、乞われるままに村々、町々を巡つて、沢山の人々に教えを説き聞かせ、生きる喜びを伝え続けたお釈迦さまのお言葉が、私にじかに話して下さっているようで、心にしみみます。

『舶来上等』という言葉がありました。日本古来のものはみんな劣つていて、舶来なら何でも勝れているというほどの意味でした。

目に見えるもの、例えば機械など勝れた技術で世界の役に立つて、気がついたら世界第二のお金持ちになっていました。これからは、敗戦後私たちが忘れてしまった日本の心、目には見えないけれど幕末や明治時代に来日した外国人が絶賛したあの姿。

家族が団欒し、子供たちが表で賑やかに遊び回り、お年寄りを敬い、他人を思いやり月や花や虫の声を愛でる心、いくなれば潤いのある豊かな心をも一度取り戻せば、本当の豊かな国になるでしょう。



◆今日の最高気温は15度でバカ陽気でしたが、まだまだ下が真っ白の朝が続きます。そんな庭先にどうしたわけか、フキノトウが3本生えていました。明日の朝、細かく刻んでみそ汁に浮かべたいと楽しみにしています。北国では、雪が消えて顔を出すのはまだまだ先のことでしょうね。でも、ものは考えようで厳しい冬に耐えるからこそ、この辺りでは味わえない、春の感激があるのでしょうね。ではまた来月に 20010/02/09 龍渉

◆気候は冬のさなかですが、4日は立春でした。春と聞くと気持ちが明るくなるから不思議です。朝6時の鐘つきは夜明けが早くなったように思えますが、夕方5時には日の入りが遅くなったのがはっきりと分かります。◆小さい頃から、何故か本を読むことが好きでした。水くみと風呂焚き、子守りは子供の役目でしたが、あかんぼを背中にして歩きながら読んでいたり、五右衛門風呂の前でも読んでいたことなど思い出します。ファーブルの昆虫記や、野上弥生子さんの『アルプスの山の乙女』

## 余滴

# 日本人情小噺

## 第五十話 親子喧嘩

いよいよ寒さも本格的になってまいりました。こんな時は、熱爛でキューツと一杯いきたいところなのですが、酒は喧嘩のタネとも申しまして、飲みすぎるとよくありませんね。酒がもとで親子で喧嘩をする「親子酒」という落語がございますが、ご存知でしょうか。

ある家で、父と息子で同時に禁酒をはじめます。ふたりとも、最初は張り合って飲まないでいたのですが、ある日のこと、息子が出かけたのを見て、父親がちよつとだけならいいだろうっていうんで、飲み始めたからもう止まらない。ペロペロに酔ってしまいます。

息子の方もせっかく出かけたんだからと、一杯。一杯が二杯、二杯が三杯……。とうとう家に帰る頃にはグデングデンでございます。

「ただいまー」「あつ、お前、酒飲んできたな。なんだ、その姿は。顔が七つも八つもある化け物じゃないか。そんな悴には財産は譲らねえ」「あたしだって、こんなグルグル回る家なんかもらたつてしようがねえ……」

まあ、こんなケンカなら罪もないんですが、今日の噺は、私の友人の家で実際にあった、かなり深刻な親子喧嘩でございます。

この家のお父さんは銀座のバーテンダーでございます。年頃なら五十五歳。お母さんは、五十歳ぐらいでございます。派手なお父さんに比べて、大変に物静か女性です。

そこに、男の子、と言いましても、もうとつくに成人は過ぎていくというひとり息子がおりますが、この子が折からの不況で「大学を出たけれど」というやつでトップピング、つまりテイシヨクにつかない。いわゆるフリーターでございます。そして、事件は、正月に起こったのです。

元日の朝、お父さんはいつもより早く目が覚めますと、息子の怒鳴り声が聞こえる。

「今日、みんなと初詣に行く予定だつて言っただろ、なんで早く起こしてくれなかつたんだよ。さつき、携帯に電話があつて、先に行くぞつて言われちやつたじゃないか」「ごめんなきい、あなたがよく眠っているもんだから、お正月だし、もう少し寝かせておいてあげようと思つて……」

「何言つてやがる。お前はいつもそうなんだ。愚図でノロマで、だから、俺がまともに就職できないんだ。それに、お前は頭が悪い。馬鹿だ、馬鹿、馬鹿」

息子がお母さんのことを「お前」とか「馬鹿」呼ばわりしていることに気が付いたお父さんは、あわてて部屋からパジャマのまま飛び出て、キッチンに向かいました。

「あつ、お父さん。お父さんは出て来ないで」  
お父さんの姿に気付いたお母さんは、お父さんの前に立ちほだかります

「おい、誰に向かつてモノを言つているんだ。お前の母親だぞ」  
「親父か。親父は黙つていろよ。俺はこいつに言つてるんだ」

「自分の母親に向かつて『こいつ』とはなんだ、謝れ！」  
「なんで俺が謝らなければいけないんだよ！謝るのはこいつだろ、土下座して謝れよ」  
売り言葉に買い言葉。喧嘩つていうのは、こういうことで大きくなるんですねえ。

「この野郎、親に向かつて、なんだ、その言い方は。もう一度、言つてみろ。まともに働きのしない、そんなこと、よくお母さんに言えるな」

すると、息子の牙は、お父さんに向かつてきたのです。  
「なんだよ、親父。俺がまともに働けないのは、お前がくだらねえ仕事をしているからじゃねえか。夕方までぶらぶらして、夜になると出かけて。お前こそ、まともな仕事をしていねえじゃねえか」

「なにー！ お前がここまで育つたのは誰のおかげだと思つているんだ！」

これがまた、息子にはカチンと来た。  
「冗談じゃねえよ、よく聞けよ、子供はな、親を選べねえんだよ。かわいそうなのは、俺だよ。こんなどうしようもねえ両親に育てられてよ」

お父さん、ついカーツとなつて、  
「てめえなんか、出て行け！」と子供の頬を思い切り殴つた。すると、息子はまな板の上にあつた包丁を手にして、こう言つたんだそうです。

「ああ、出て行つてやるよ、その前にお前を殺してな」  
さすがのお父さんも、ギラギラした目をして包丁を両手で握っている息子の殺人鬼のよらかな姿に、思わず後ずさりします。息子は、もう完全に頭に血のぼつてしまつています。

つけっぱなしのテレビの居間からは、お笑いタレントたちの笑い声が聞こえています。その時です。

それまで、ただオロオロするだけだつたお母さんが、お父さんの前に立ちほだかりました。なんと、手には別の包丁を握っているじゃありませんか。お父さんも息を飲みました。

それはそうでしょう、妻と息子が互いに包丁を握つて、向かい合つている光景など、誰が想像できるでしょう。しかし、お母さんは落ち着いて、息子にこう言つたそうです。

お父さんを殺しちゃダメ。私はあなたを殺人犯にするくらいなら、私があるなを刺して殺人犯になります」

すると、どうでしょう。息子は、包丁をゆつくりと置き、両親の間をすり抜けて、自分の部屋に戻つていきました。お母さんは、自分も包丁を置くと、彼のあとを追つて行き、なかなか出てこなかつたそうです。

あとで、お父さんが聞いた話では、部屋に入ったお母さんは、息子にこう語りかけたそうです。  
「ごめんね。朝、起こさなくて。こんな愚図で馬鹿なお母さんで、本当にごめんね」と。

いまでは、その息子も就職が決まり、何もなかつたように明るい家庭になつたと、私に特製のカクテルをシェイクしながら話してくれました。禍福はあざなえる縄のごとし。家庭内の事件つて、こんなこと起こるんですね。

今月も月刊誌MOKUと三遊亭鳳豊（さんゆうてい・ほうほう）さんのご好意で転載させて頂きました。